

『人文論叢』創刊50号に寄せて

大 國 義 一

『人文論叢』が創刊されて以来、今号でちょうど50号を数えることになりました。『人文論叢』が創刊されたのが昭和33年の9月で、一時は年2回刊行されたこともありますが、毎年1回の刊行は途切れることなく続き此度50号を迎えたことは大変喜ばしいことです。

『人文論叢』の創刊の趣旨および経緯は、故中村茂夫氏が、昭和53年に創刊20年記念号を出した折の巻頭言に詳しく述べられています。

その一部を引用させていただきますと、「学問上の新しい発見や解釈が学界で承認される場合、その評価について大事なことは、誰が最初にそれを述べたかという発表の優先性であるから、研究に携わる者の切実な希望は、自分が努力してまとめた新しい研究成果をできるだけ早い時期に発表することである。発表機関が一般の権威ある専門学会誌の場合は、広く専門の学者の眼に解れるという大きな利点はあるけれども、掲載論文には必ず紙数の制限がある上に、たとえ採択され、掲載されても活字になるまでにはどんなに早くても一年から時には二年以上もかかる。さらに論文が短編でなくて中編ないし長編でまとまるような場合には、こういう専門機関誌での発表はほとんど不可能に近

い。……中略……そこで本学の中で学会を作り，機関誌をもち，会員が自由な形式で，しかも早く発表することができる機会をもちたいと考え，その結果『人文論叢』を創刊しえたのは大変有難いことであった。」と述べられています。この趣旨通り学会員の投稿は速やかに活字となり公刊されてきました。

しかしどの大学にもあるこの種の機関誌については掲載論文の質を高める努力が必要です。このことについても中村茂夫氏は言及されています。すなわち「執筆者としてつねに学術論文の原点に帰り，発表に当ってはできるだけ厳しい学問的良心を貫いてほしい。そして学外にある同学の専門研究者の批判をたえず意識して欲しいと思うのである。」と述べられています。『人文論叢』に掲載された論文が，夫々の分野での年間優秀論文抄録集に転載されたり，他の研究者の論文に何度も引用されている事実は，中村氏の戒を会員が肝に銘じて精進している証拠と考えてよいでしょう。

『人文論叢』の刊行母体である人文学会は，今までは一般教育の人文分野，社会分野それに外国語分野に属する教員で組織されていました。ところが平成12年に新学部が出来るなど，学内では大幅な組織換えがあり，人文・社会両分野は他学科に吸収され，外国語分野だけが残りました。しかし他学科の機関誌ではなじみ難い分野の論文もあり，伝統ある『人文論叢』が何らかの形で，今後存続できることを切に願っております。